

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	田中 文菜
論文題目	愛着と養育 —カメルーン東南部の狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の民族誌—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カメルーン東南部に住んでいる狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の記述と分析をおこない、それをふまえてジョン・ボウルビイの提案以降さまざまな研究者によって議論されてきた愛着理論を再検討し、新たな研究の展望を提示したものである。</p> <p>序章では、ボウルビイの愛着理論とその後の展開についてレビューし、狩猟採集民の養育において母子密着とマルチプル・ケアテイキングのいずれが重要であるかが論点となってきたことを確認した。そのうえで、それらの二者択一にならないように狩猟採集民の子育てについて論じる、と本論文の視座を定めた。</p> <p>第1章では、マルチプル・ケアテイキングの例とされてきたバカと母子密着の例とされてきた南部アフリカの狩猟採集民クンを対象として、養育行動と乳幼児の行動を同じ指標をもちいて量的に比較している。その結果、バカでも母子密着の重要性が示唆され、クンでもマルチプル・ケアテイキングの存在が示唆された。したがって「子育てにおいて母子密着とマルチプル・ケアテイキングのどちらが本質的か」という問いは論争のための問いであって、じっさいには母子密着とマルチプル・ケアテイキングが両立していること、したがって狩猟採集民の子育てを理解するためには、どちらがどのような場面において機能しているかについて丁寧に分析する必要があると指摘した。</p> <p>第2章では、母親との結びつきが強い離乳前の2歳前半児を主な対象として参与観察をおこない、量的データでは捉えきれないバカの養育行動と幼児の愛着行動について記述・分析している。居住集団の構成が頻繁に入れ替わるバカの社会では、生業活動・家事・ケアは、その場その場で生じる集まりのなかで連携しておこなわれている。明確なリーダーはおらず、各々の役割は流動的で、誰がどのような役割を担うかはその場にあわせたメンバーどうしの関係性のなかでそのつど変化する。幼児の愛着行動は、そのように変化する集まりのなかで、母親をふくむ複数の養育者との相互行為をとおして生み出されていることがしめされた。</p> <p>第3章では、バカの子どもがおこなう歌・踊りを記述し、その特徴を分析している。バカの歌・踊りにはその実践を推進する役割をもつ人が配置されておらず、それにもかかわらず全員が動作をあわせて動きが変化していく歌・踊りが多くみられた。この特徴は第2章で記述したバカの集団のあり方と類似していることが確認された。</p>			

第4章では、大勢のバカが集まる歌・踊りの場面で、離乳前の幼児が誰を「安全基地」として探索行動をしながら集団活動に参加しているのかを、母親の歌・踊りへの参加の度合いとの関係に着目して記述・分析している。幼児は、母親が接近可能な距離にいた場合でも、他の大人や年長児を「安全基地」として探索の範囲を広げ、歌・踊りに参加していた。愛着対象者たちは連携して幼児と母親の接近と分離のバランスをとっており、幼児の集団活動への参加を支援していた。その連携のもとで、幼児が主体的に愛着行動と探索行動をおこなうことができていると指摘した。

終章では、狩猟採集民における愛着概念について再検討し、今後の研究を展望している。バカの愛着と養育を理解するためには、子どもと養育者の二者関係ではなく、複数の養育者をふくむ集団全体を俯瞰的に把握する視点が必要であると指摘し、この分析枠組みを、子育ての「連携システム」と名づけた。また、バカの子育ての連携システムは、子育てのみに限定されているのではなく、生業活動や家事、歌・踊りなど彼らの生活全体にかかわる連携システムと連続している点を強調している。以上をふまえて、狩猟採集民の子育てを理解するためには、連携システムの全体性を念頭におきながら記述・分析する必要があると論じた。

(論文審査の結果の要旨)

社会性の発達の基礎として乳幼児期に特定の養育者（とりわけ母親）と親密な関係を築くことが必要である、という愛着理論をボウルビィが提示したのは1960年代末であったが、いまなお愛着理論は子育て研究や子育ての現場において影響力を維持しつづけている。その過程で、アフリカ狩猟採集民を対象とする子育て研究は重要な役割を果たしてきた。当初、南部アフリカの狩猟採集民サンの子育てにおいて母子関係の重要性が指摘され、それは愛着理論の正しさを保証するものとされた。その後、本論文の対象であるバカをふくむ中部アフリカの狩猟採集民ピグミーでは、母親以外の養育者が子育てに積極的に関与するマルチプル・ケアテイキングが広くみられることが指摘された。こうして「狩猟採集民の子育ては、母子密着なのか、マルチプル・ケアテイキングなのか」という問いが研究の枠組みとなってきた。本論文は、このような研究史を念頭において、中部アフリカ、カメルーン東南部に住んでいる狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の記述と分析をおこなったものである。

本論文は以下の2点においてアフリカ地域研究に重要な貢献をなしている。

第一に、アフリカ狩猟採集民の二つのグループの子育てを定量的に比較することにより、母子密着かマルチプル・ケアテイキングか、という研究の枠組みを更新した点である。サンは母子密着で、ピグミーはマルチプル・ケアテイキングであることは、各々を対象とする研究でそれぞれ主張されたのであり、これまで同一の指標にもとづく比較はなされていなかった。本論文では、クン（サンの一集団）を対象とする先行研究と同一の方法をもちいてバカの養育行動と乳幼児の行動を記録して両者を比較し、バカでもクンでも母子密着的な場面も見られればマルチプルの場面も見られることを確認した。この結果をふまえて、従来の研究の枠組みでは二つの狩猟採集民の差異が強調されすぎていることを指摘したうえで、狩猟採集民の子育てを理解するためには、母子密着とマルチプル・ケアテイキングそれぞれが、日常生活のどのような場面でどのように機能しているかを丁寧に記述し、分析する必要があると指摘している。

第二に、バカの乳幼児と養育者の相互行為の民族誌的記述と分析をふまえて、狩猟採集民の子育て研究の新たな枠組みとして、乳幼児にかかわる人々の「連携システム」を提示した点である。バカの居住集団の構成は頻繁に入れ替わり、各々の役割は流動的で、生業活動・家事・ケアにおいて誰がどのような役割を担うかはその場にいあわせたメンバーどうしの関係性のなかでそのつど変化する。本論文では、生業活動や歌・踊りなどの日常生活のなかで、大人や年長児が連携して乳幼児と母親の接近と分離のバランスをとりながら乳児のケアをしたり幼児の集団活動への参加を支援したりしており、その連携システムをとおして、乳幼児が主体的に愛着行動や探索行動を

おこなうことができるようになるようすを詳細に記述している。そのうえで本論文では、子どもと養育者の二者関係ではなく、複数の養育者をふくむ集団全体を俯瞰的に見わたす視座から、乳幼児と養育者の相互行為を捉える必要があると主張し、その分析枠組みを、子育ての連携システムと名づけている。それは、生業活動や家事、歌・踊りなど日常生活のなかに子育てを位置づけて記述・分析することを可能にする点で、すぐれた枠組みだといえる。

このように本論文は、中部アフリカ狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為について民族誌的な記述と定量的な分析をおこない、愛着理論とその後の一群の研究を批判的に検討したうえで、独自の分析枠組みを提示して新たな研究を展望することができる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また2024年1月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表にさいしては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。